

# 認知症の人が住みたい街は？

## 高知市で当事者ら意見交換



認知症の人が住みたい街づくりについて意見交換する山中しのぶさん(中央)と矢吹知之准教授(右)ら(高知市知寄町2丁目のちより街テラス)

9月21日の「世界アルツハイマーデー」を記念した講演会がこのほど高知市で開催された。若年性アルツハイマー型認知症を公表し、当事者目線でデイサービスなどを運営している山中しのぶさん(46)＝南国市＝らが登壇。認知症の人が住みたい街づくりについて意見を交わした。

山中さんは41歳で認知症

と診断された当初、人に助けを求めることができず、心を閉ざして鬱状態になっていたと述懐。デイサービスの運営などを通して利用者や仲間から自分が必要とされたことで、「洗濯物を洗うのを忘れてたり生活の中での失敗は増えたが『私は何もできなくなったわけじゃない』と思えた」と振り返った。

また、運営するデイサービスの工夫も紹介。通常は利用者ができないことを書き込むアセスメント(評価)に「やりたいこと」や「好きなこと」の項目を加えるなどして、「利用者ができないことではなく、できることを考え、自分らしい生き方を選べるようにしている」と話した。

高知県立大学の矢吹知之准教授も「認知症と診断された人から一律的に全てを取り上げるのではなく、当事者ごとに柔軟に判断することが重要」と強調。「認知症を克服するには当事者を取り巻く社会が変わる必要がある。強くなることを強制されず、当事者の性質をそのまま受け入れる街づくりを」と訴えた。

「認知症の人と家族の会 県支部」(楠木司代表)と県が10月8日に開き、約140人が聴き入った。

(相良平蔵)